

ロンドン旅行記(その 4)

[Oliver!] 11月17日朝 レスタ・スクエア Leicester Square の「半額切符売り場」へ行った。売れ残りを売るのだが、すべてが半額と言うわけではない。演劇では会話を聞き取れるか自信がない。粗筋を少しは知っていても人間関係が複雑な「理想の夫」(An Ideal Husband - Oscar Wilde)でも同じこと。やはりミュージカルに限る。「オペラ座の怪人」は15年前、「レ・ミゼラブル」は20年前に見た。では30年前(1980年)に観た「オリヴァー」にしようか。他に観たことのない新しいミュージカルがいくつもあったが、好きなものを観るのが一番だ。「今晚のよい席」を頼んだら「62.50ポンドが38.50ポンドに下げた券がある」とのこと。1ポンド=133円。これに決めた。夜7時半、実際には満席ではなく2階ドレスサークルは3分の2。子供づれもいるが中年客が多い。

駐在時代の1980年1月、僕が39歳、家内が34歳、息子が6歳、娘が5歳。家族で「オリヴァー」の夜の部を見に行き、終演時にFoyerでレコード(1960年初演のもの)を買い、帰りに中華街で食事をした。翌日、日本から長兄の電話があり、「父が今年5月までの命」と知らされ、2月に一時帰国をした。



“Oliver!, Oliver!”

“Please sir, I want some more“

「オリヴァー」は1960年初演だから今年が50周年。作詞・作曲のLionel Bartは1930年生まれで1999年に亡くなっている。1980年上演の劇場は、1960年初演と同じAlbery Theatreだった。今は名前がNew Theatreに変わっている。今回はTheatre Royal, Drury Lane(写真)。ここは以前Drury Lane Theatreとってミュージカル「Camelot」「Cat」の初演されたところだ。1984年2月日本へ帰任するとき、借家を出て出発までの短期間、家族でDrury Lane Hotelに滞在した。きれいで感じのよいホテルだったが、今回見に行ってみたらビルの外観はそのままだが、「Travel Lodge, Covent Garden」と変身していた。帰任直前、はじまって間もない「Cat」を観に行かなかったのは猫が好きでないからだが、いずれにしても当時切符が入手しにくいとのうわさがあった。

そうだ、「オリヴァー」について書いているのだった。映画化は1968年、マーク・レスターがオリヴァーで、日本でも評判になり、オスカーをいくつも受賞した。映画化が初演から8年もたってからだったのは、ロンドンでの劇場上演を邪魔しないためだったそう。当時、僕(20代後半で独身時代)は毎週火曜・土曜に通っていた合唱団で「オリヴァー」のいくつかの歌を合唱で歌ったことがある。

前回観たときとの違い。ダンスがより活発で気持ちよかった。舞台展開が巧妙だった。ひとつには技術の発達もあろうが、Alberyは幅があって浅いのに対して、Drury Laneは奥行きがある。そのため「Consider Yourself(写真)」「Who will buy?」などの群集シーンで威力を発揮した。舞台の幅を補うためか、左右に渡した橋も有効に使っていた。歌唱力は全般的に前回のほうが優れていたように思う。



“Consider yourself at home”

初代 Fagin と最新の Nancy

個々の役柄について：

Nancy: 1960 年初演時のジョージア・ブラウンは写真とレコードで知る限りでは姐御系。映画のシャニ・ウォリスは可憐系。 1980 年に見たときのヘレン・シャピロでその中間。今回の ケリー・エリス(写真)は可憐系で見事な熱演だった。前頁の写真の Nancy の横で手を上げているおじいさんは、今年 50 周年記念でアドバイスをした初演時と映画での Fagin 役の Ron Moody。3 年ほど前に映画の Artful Dodger 役のジャック・ワイルドがなくなったときに、追悼の言葉を彼が述べているのを BBC World のニュースで見たことがある。そのとき、マーク・レスターは電話で追悼の言葉を述べていたが画面には現れなかった。

Fagin: 今回の興行が始まったのは昨年はじめで、その時の Fagin は「Mr. Bean」のローワン・アトキンソンだったという。Mr. Bean の印象が強すぎるのではないかと思うが、当時の評判はすこぶるよかったらしい。ところが病気で降りてしまった。今回は Russ Abott という喜劇俳優(もともと Musician)で Fagin を演ずるのは初めてではない。結構面白かった。1905 年、芝居の Oliver Twist 上演の際の Fagin は映画監督 Carol Reed のお父さんが演じ、Artful Dodger は 16 歳のチャップリンが演じたという。

Bill Sikes: 今回の Steven Hartley はガラガラ声、大きな体、面構えはよいのだが、立ち居振る舞いが軽くて、凄みを減じていた。映画の Oliver Reed は無口(「My name」も歌っていなかったと思う)の凄みがあった。今や故人の Oliver Reed は Carol Reed の甥。

Mr. Bumble : Christian Patterson コメディアン側に寄りすぎ。時には怖さも見せない。

Mr. and Mrs. Snowberry (葬儀屋夫婦) : いずれも映画と、前回観た時の配役の方が、気味悪さと滑稽さを兼ね備えてよかった。なお映画では「That's your funeral」という歌がでてこない。子供が真似をすることを危惧したのかな？あるいは映画には完全版と「That's your funeral」と「My name」を抜いた版の 2 種類があるのかもしれない。

ミュージカル「オリヴァー」はディケンズの小説を直接元にしたのではなく、David Lean 監督による 1948 年の映画が元になっていると想像されるそう。後半の

筋の「はしより」が似ているから。この映画は Bill Sikes が Robert Newton (僕は映画「宝島」の John Silver を憶えている)で、Fagin は Alec Guinness。この英国製映画は米国で3年間上映されなかった。Fagin のつけ鼻と Yiddish アクセントが Anti-Semitism として米国のユダヤ人が反対運動をしたから。逆の話もあって、1921年の米国製映画 Oliver Twist は、英国で「公序良俗を乱す」として上映禁止になったという。ありうる話かも。なにしろカール・マルクスは「ディッケンズは独りで、政治家と評論家が大勢で東になってもかなわないほど、社会問題の告発をした」と言ったそうだから。

ディッケンズ描くところの Fagin は、シェイクスピア描くところのシャイロック(ヴェニス商人)とともに Anti-Semitism として批判の対象になるそうで、Fagin は芝居や映画では、だんだん「よいところもある」悪人に変容してきたらしい。ミュージカル「オリヴァー」の Fagin は特に愛すべき人物になっている。ついでながら、原作では死ぬのにミュージカルでは死なない。ちなみに作詞・作曲の Rionel Bart も、初代 Fagin の Ron Moody も、初代 Nancy の Georgia Brown もユダヤ人。

話はとぶが、ロンドン駐在時代、ロンドンの Golders Green というところは Jews と Japanese が多く住んでいるので JJ Village と呼ばれていた。今でもそうかは知らない。米国映画界、クラシック音楽界、ノーベル賞受賞者のユダヤ人比率の高さなどに話が移りそうなので、この話題はやめよう。

ミュージカルの話。私見では、次から次へと名曲がでてくるのは、オリヴァーとマイ・フェア・レイディとサウンド・オブ・ミュージック、これに続くのがウェストサイド・ストーリー、南太平洋、王様と私、回転木馬、レ・ミゼラブル、オクラホマかな。英国製では Me and my girl。アンドリュー・ロイド＝ウェッバにも個々の作品でとてもよい曲があるが、一つの作品で次から次と名曲が出てくるとはいえない。(異論もあるでしょう) オペラでいえば、椿姫とカルメンでは次から次へと名曲が出てくるけど、プッチーニではそうはいかない。

というわけで今回は数々の名曲とすばらしい舞台を堪能しました。

(その4 終わり)

極めて個人的な記録

ロンドン駐在中に観たミュージカル		
家族で	ジンジャーブレッドマン	ミュージカルかパントマイムか?
	シンデレラ	クリスマスシーズンのパントマイム (無言劇ではない)
	オリヴァー	
夫婦で	ジーザス・クライスト・スーパースター	子供を家内の友人に預けて
	マイ・フェア・レディ	子供をオペア (海外からの留学生でアルバイトに女中さんをする) に預けて
家内一人で (僕は留守番)	王様と私	ユル・ブリナーの最後の舞台
	雨に唄えば	もちろんジーン・ケリー <u>ではない</u> 。トミー・スティール(1936年生まれの英国人。ロックンロールシンガー出身)
家内と家内の友人で (僕は留守番)	エヴィータ	初演オリジナル・キャスト。初演前のトライアルではエヴァ・ペロン役はジュリー・コヴィングトン(歌がすごく上手)。初演では降りてしまって、公募でエレイン・ペイジが選ばれた。
ロンドンから帰任後、英国出張ついでに観たもの		
	エヴィータ	
	レ・ミゼラブル	僕が観た後、家内と娘がロンドンで観ているはず。
	エイドリアン・モウル	歌つきコメディイ?
	ミー・アンド・マイガール	
	ミス・サイゴン	
	オペラ座の怪人	
ロンドンとは異なる都市で		
ウイーン	エリザベート	出張ついでに
N.Y.	42 nd Street	夫婦と息子で
エッセン	エリザベート	休日オランダから夫婦で
N.Y.	アイダ(オペラではな	家内と息子で (僕は観ていない)

	い)	
--	----	--